

金 融 市 場 動 向

— 平成 6 年 5 月 —

(平成 6 年 6 月 13 日)

1. 短期金融市場

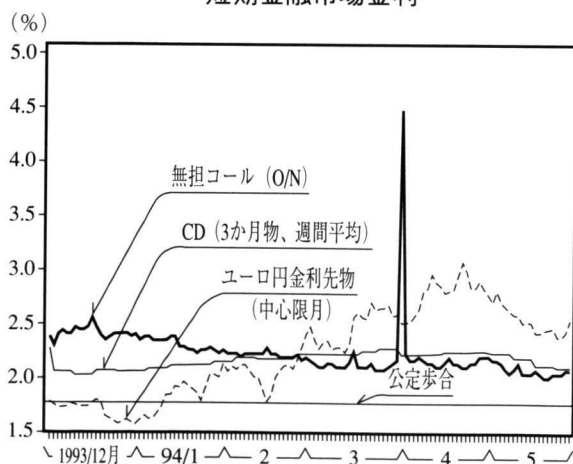
5 月中の無担コール・オーバーナイト物レートは中旬以降緩やかに低下し、23日に既往ボトムを更新した後、概ね既往最低水準で推移した。また、CD（譲渡性預金）3 か月物レートは月央にかけて低下し、その後は概ね同水準で推移した。ユーロ円金利先物（金利ベース）は上・中旬中低下した後、月末にかけて若干上昇した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は43兆7,783億円と前月（43兆9,484億円）を若干下回った。

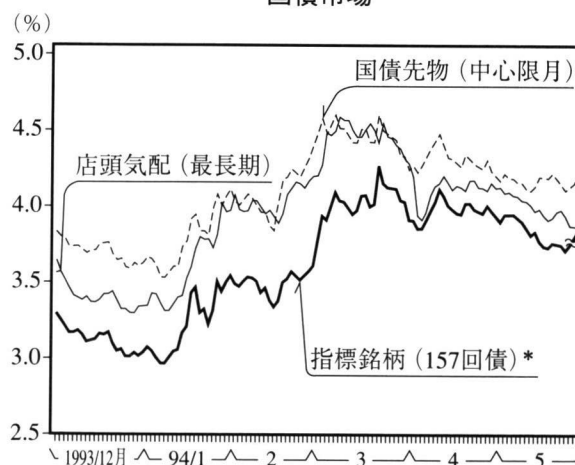
2. 資本市場

5 月の長期国債利回り（指標銘柄、27日に157回債から164回債に移行）は、為替相場の落ち着きや国内短期金利が既往最低水準で推移したこと等を背景に低下傾向で推移したものの、月末にかけて若干上昇した（3.840%で越月＜前月末3.935%＞、国債先物中心限月利回り＜18日に94年6月限から9月限に交替＞は4.232%＜前月末4.200%＞で越月）。国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

短期金融市場金利

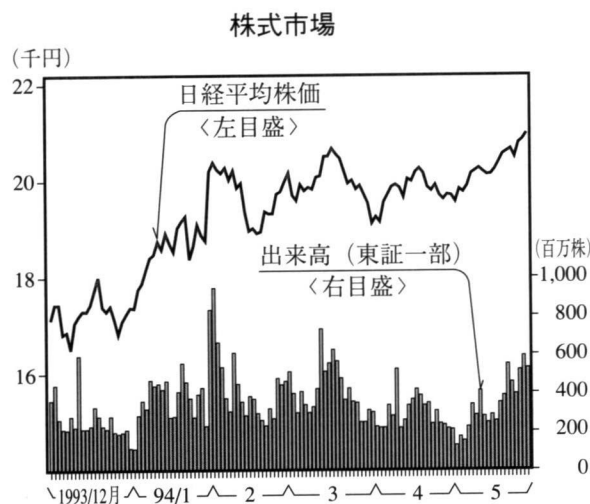


既発債市場利回り
— 国債市場 —



(注) *5月27日以降は164回債。

株式市況（日経平均株価）は、企業業績の回復期待が高まる中、為替相場の落ち着き等も好感され月中を通じて上昇し、20,973円で越月した（前月末比+1,248円）。また、株式出来高（東証一部月中1営業日平均）は3.49億株と前月（2.99億株）を上回った。



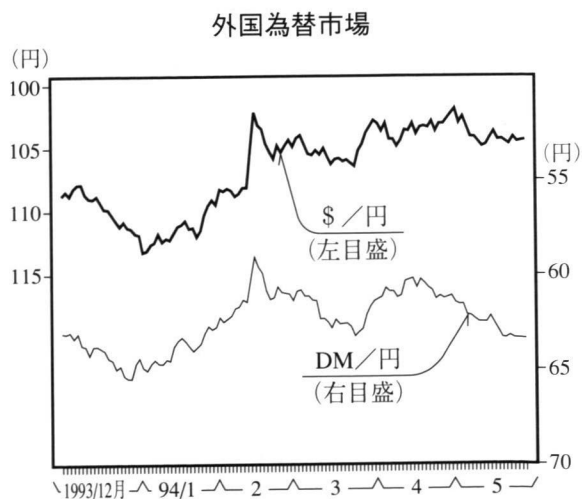
起債動向をみると、長期国債は、10年物（価格競争入札分）がクーポン・レートが前月債比0.2%引き下げられた中、総じて低調な入札となった（5月24日入札分<6月債>は募入平均利回り3.978%、応募倍率2.32倍）一方、6年物は足元の短期金利低下を眺め、好調な入札となった（5月11日入札分は募入平均利回り3.497%、応募倍率3.99倍）。また、超長期国債については、生保等の投資家ニーズが強いことから順調な入札結果となった（5月19日入札分は募入平均利回り4.483%、応募倍率2.63倍）。中期国債については好調な入札となった（5月18日入札分<2年物>は募入平均利回り2.399%、応募倍率3.41倍）。また、短期国債は、6か月物が総じて低調な

入札となった一方、3か月物は好調な入札となった（5月10日入札分<6か月物>は募入平均利回り2.275%、応募倍率1.55倍、5月17日入札分<3か月物>は募入平均利回り2.088%、応募倍率3.81倍）。

5月の国内公募普通社債は、債券市況が比較的堅調に推移する中、3,250億円の発行となった（4月3,350億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（5月払込み分、増資を除く）は例年と同様決算発表を前に起債を抑える先が多かったこともあり、前月を大幅に下回った（4月1,200億円→5月180億円）。

3. 外国為替市場

5月の円の対米ドル直物相場（終値）は、月初に海外市場で上伸したものの、各国中央銀行による協調介入報道等から月央にかけて弱含んだ後104円台を中心に推移、結局104.38円（東京市場）で越月した（前月末102.38円）。一方、円の対独マルク相場（東京市場、終値）は、独景気回復期待や独政策金利の下げ止まり感等を背景に軟調に推移



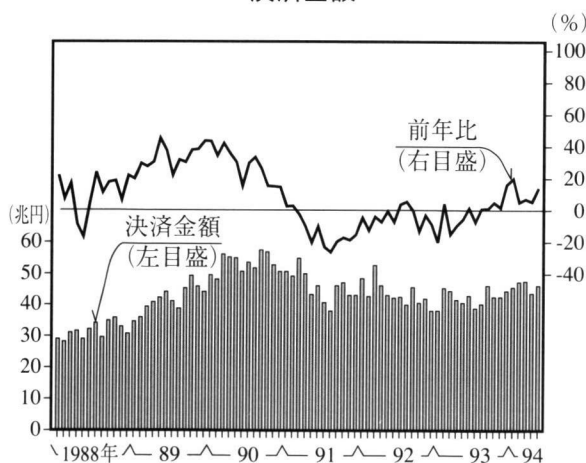
し、63.43円で越月した（前月末61.18円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は138.3億ドルと、前月（139.8億ドル）を下回った。

4. 決 済

5月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△8.2%）一方、全銀システム取扱高（前年比+6.8%）、外為円決済交換高（同+27.1%）はそれぞれ前年同月を上回った。また、国債の決済金額（1営業日平均）については移転登録（前年比+20.9%）は前年同月を上回った一方、振込口座振替（同△1.4%）は前年同月を下回った。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。

2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

5月の資金需給をみると、銀行券要因が2兆6,925億円の余剰（前年同月2兆2,630億円の余剰）となった一方、財政等要因は、源泉所

得税を中心とした税揚げや厚生・労働保険料の受け入れ等も嵩^{かさ}んだため、1兆6,101億円の不足（同1兆8,769億円の余剰）となった。こうしたことから全体では1兆824億円の余剰（同4兆1,399億円の余剰）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B売却等により資金を吸収した。

6月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因が公務員・民間ボーナス支払資金を中心に月中2兆1,000億円程度の不足（前年同月1兆9,449億円の不足）となる見通しである一方、財政等要因は普通交付税交付金や国債償還等の支払いを中心に6兆2,000億円程度の余剰（同5兆9,334億円の余剰）となる見通しであり、全体では4兆1,000億円程度の資金余剰（同3兆9,885億円の余剰）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

4月のM₂+CD平残前年比伸び率は+2.1%と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。通貨種類別にみると、CDの伸び率が低下した一方、預金通貨、準通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.2%と前月に比べ0.2%ポイント低下した。

5月の銀行券平残前年比は+4.2%と前月（+4.5%）を下回った。

5月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+1.9%と前月比低下した。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+0.1%と前月に引き続き既往ボトムを更新した。

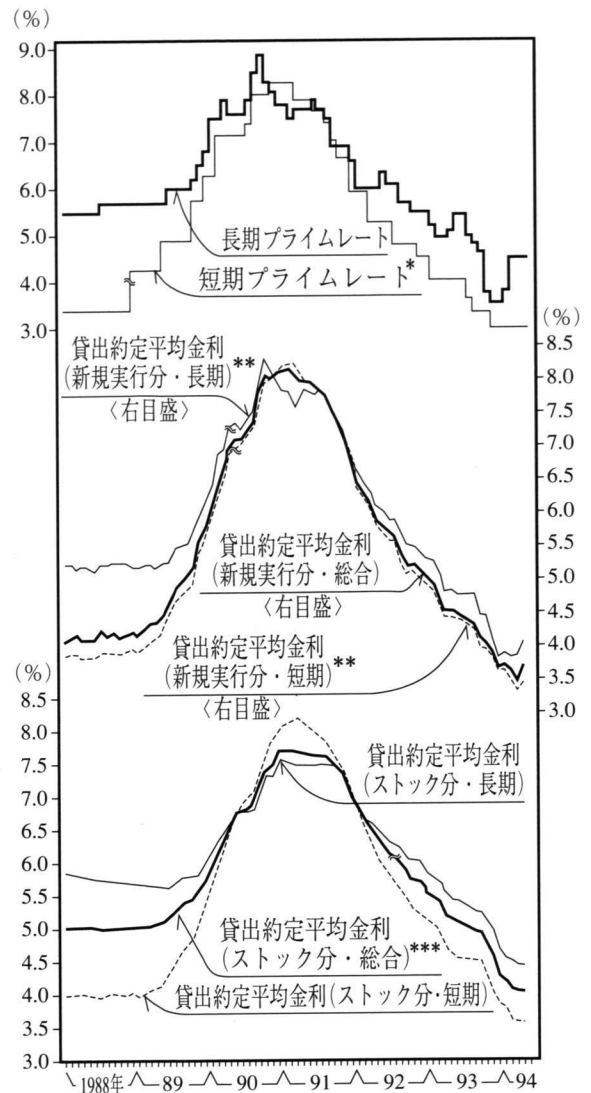
7. 貸出・預金金利

4月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期が6か月ぶりに上昇した（前月比+0.141%）ほか、長期も2か月連続で上昇した（同+0.181%）ことから、総合でも6か月ぶりに上昇した（同+0.127%、総合：3月3.484%→4月3.611%）。

一方、ストック分については、短期、長期、当座貸越、総合ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比△0.033%、長期：同△0.021%、当座貸越：同△0.021%、総合：同△0.019%）、既往ボトムを更新した（総合：3月4.179%→4月4.160%）。

この間、4月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比低下した（3月2.051%→4月2.027%）。

貸出金利（全国銀行）



(注)* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

（調査統計局）